

ヤン・ファン・デル・ヌートの『俗人の劇場』 とエドモンド・スペンサー

松 田 美作子

はじめに

ヤン・ファン・デル・ヌート (Jan van der Noot, 1539-95) の『俗人の劇場』 (*Het Theatre oft toon-neel...*, 1567) は、ヌートの意図ではないといわれているが、彼の韻文に図版と散文の注釈が付され、イングランドで初めて印刷されたエンブレム集と認められている。¹⁾ ヌートは、ブラバント公国 Brecht に生まれ、1558年アントウェルペンに移りカルヴァン派信者となったプレイアード派の詩人かつヒューマニストであった。アントウェルペンのカルヴァン派がスペインに制圧された1567年、彼はイングランドに避難してきて、おそらく1570年に Cleves に移るまでロンドンに居住した。²⁾ 本書はオランダ語版から順にフランス語版、英語版、ドイツ語版と出版された。英語版を除いて図版は、やはり1568年3月にスペインの迫害を恐れイングランドへ避難してきた新教徒たちの一人、マークス・ヘラート (Marcus Gheeraerts the elder) が担当した。すでに彼は、イソップ寓話に付した挿絵で大きな影響力を与えていたが、ロンドンに居住した初の挿絵画家となり、Stephan Bateman や Holingshed の本の挿絵を担当した。彼をはじめイングランドに避難してきた低地地方の職人たちは、イングランドにおける装飾芸術や銅版画の発展に大きく寄与した。低地地方との交流は、13世紀にミルクを輸入していたころから増大し、1560年から1590年までイングランドへの移民数は5万人とも推定されている。³⁾ また、文学史の面でも本作は、低地地方におけるペトラルカの受容という点で重要な位置を占めている。⁴⁾ 仏語版はフランス語に秀でたヌート自身が訳したが、英語版は、エドモンド・スペンサーがその仏語版から英訳している。彼の

英訳は、ヌートの仏訳の忠実な翻訳だが、スペンサーの文学的キャリアの出発をなす翻訳に、彼の創意工夫も看守できる。スペンサーは、このエンブレム集のソネットをさらに洗練させ、1591年、『嘆きの詩』(Complaints)で再録するが、『俗人の劇場』の最後を飾るヌートの作である黙示録的な4編のソネットは省かれている。誰より学究肌の詩人であり、詩形や音韻に工夫を重ねたスペンサーが、16か17歳で訳したこれら4編のソネットを再録することがなかったのはなぜか。この点を明らかにするために、1560年代後半から90年代に至るエリザベス治世下の政治的、宗教的環境の変化に注目するとともに、視覚文化の一角を占める当時の紋章学を援用して、スペンサーの創作に及ぼした影響を追求したい。

『俗人の劇場』出版の背景

『俗人の劇場』の3か国語版の刊行された日付をみると、それらの間隔は空いていない。オランダ語版は、John Dayによって1568年9月18日に、フランス語版は、同じくジョン・デイによって1568年10月28日に、そして英語版はHenry Bynemanによって1569年5月25日に出版された。英語版はロンドン市長ロジャー・マーティンに、あとの二作はエリザベス女王に献上された。デイはロンドンのオランダ人社会、つまり避難してきたユグノーたちに大変信頼の厚かった印刷業者で、トマス・ノートンのような反カトリック派の作家を支持する書籍を次々に出していた。⁵⁾ バイネマンも1568年、スイスのプロテスタント派神学者、Pierre Viretの著作のオランダ語版を出したりしたデイと同様な人物だった。(Westerweel 42-43) 当時、カンタベリー大司教、Matthew Parkerがパトロンとなって、ランベス宮殿にdrawers, cuttersなどを集めて書籍を製作していたが、バイネマンもパーカーのために仕事をして一人だった。このエンブレムブックが相次いで出版されたのは、プロテスタント派の支援が急務だったからであろう。1567年早春、アントウェルペンのカルヴァン派をスペインが制圧し、ヌートはイングランドへ避難してきた。翌1568年は、オラニエ公ウィレム一世がアルバ侯に戦いを挑み、以後80年にわたる独立への戦いが始まった年である。1560年代後半から70年代にかけて予想外に長期化するネーデルラント

の反乱は、エリザベスにとって大変頭の痛い問題であった。北部7州への支援に慎重な女王に対して、枢密院でバーリー卿と勢力を二分していたレスター伯は、1570年代以降、サー・フィリップ・シドニー、ウォルシinghamらとともに対カトリックへの戦闘的姿勢を鮮明にしていく。そしてスペンサーは、コリン・バロウの言葉を借りれば、「低地諸国における強硬な（費用のかさむ）反スペイン政策を支持し、かつ終始一貫して本国のプロテスタント教会の継続的改革を切望する者たちのパトロンであったレスター伯の急進的プロテスタント政策に生涯強い好意を示している」詩人であった。(34) そのことは、1579年にはレスター伯の秘書として雇われレスター・ハウスに住んだこと、レスター伯亡き後を継いだエセックス伯が、1599年1月19日に困窮のなかで亡くなったスペンサーの葬儀費用を担ったことから伺える。

「大陸」のプロテスタント派にとって、イングランドは汎ヨーロッパ的な反カトリックの中心勢力となることを期待されていた。1584年6月、支援者フランスのアンジュー公が亡くなり、7月にはオラニエ公が暗殺され、中心的権威者不在のネーデルラントは深刻な危機に陥った。1570年代にエリザベスがとった金銭援助という消極的政策は、転換を迫られ、1585年レスター伯は、イングランド軍を率いてエセックス伯、シドニーらとともに遠征している。ネーデルラント入りした彼は歓迎で迎えられるが、彼に將軍としての資質がなかったこと、イングランド軍の軍規が乱れていたことなど、その期待は裏切られることとなる。後でネーデルラント反乱に関して触れるが、ヌートの『俗人の劇場』は、こうした「大陸」のプロテスタント派の反乱の動向の文脈に置かれるべきで、出版というメディアを用いた強力な宗教的プロパガンダととらえることができる。フランスのユグノー、ジョルジェット・ド・モンテネの『キリスト教的エンブレム集』（リヨン、1571年）もまた、暴虐を尽くすカトリック派に対して作成されたように、宗教戦争の拡大に伴い、イングランドでも宗教対立がエンブレム作成の動機となっている。次に具体的に『俗人の劇場』についてみていこう。

『俗人の劇場』の構成

『俗人の劇場』は、3つのエンブレム・グループと長い散文の注釈部

分からなる。前付け等のあとに、まず6編のエピグラムが続く。これはエピグラムと記されているが、14行からなるソネットで、クレマン・マロが訳したペトルルカの『カンツォニエーレ』（『俗事詩片』）323番に基づいた“Des Visions de Petrarque”で、ラウラの死を悼み、地上愛の虚しさを訴える。次に続く10編のソネットは、ジョアシャン・デュ・ベレーの“Les Antiquites de Rome”であり、地上の栄華の空しさを訴えている。最後にヌート自身の作で、黙示録に想を得た4編のソネットがきて、もっとも長い注釈がついている。すべてヴィジヨナリーな詩であるが、とくに最後の黙示録的なソネットは、反カトリックの姿勢を鮮明にしている。ペトルルカとデュ・ベレーのテーマである現世の儚さは、スペンサーのエピック・ロマンス『妖精の女王』第7巻、“Mutability Canto”に通じ、大惨事の発生の予言、反教皇を詠ったソネット連作は、スペンサーがレスター派に共鳴する宗教観を形成する一助となった。（バロウ 22）ヌートのペトルルカとデュ・ベレーの仏訳および彼のソネットとスペンサーとの関係は、のちに考察する。

次に図版について簡単に触れたい。オランダ語版とフランス語版の図版は、ヘラートの手になる銅版画である。彼は、デイが出したベイトマンの *A Christall Glasse* (1569) や、バイネマンが出したホリンシェッドの『年代記』(1577) にも関わった。英語版とドイツ語版の図版は木版画で、作者は不詳である。なぜ木版になったのか。当時、デイの工房は、ジョン・フォックスの著作他を短期間で出版しなくてはならず、バイネマンに任されたと推測されている。マイケル・バース氏は木版もヘラートが彫ったというが、確証はない。（Bath 85）ペトルルカのヴィジョンに付された木版は、当時のクレマン・マロが仏訳したソネットに付された16世紀の写本の12枚の水彩画が材源と思われる。⁶⁾ マロの6行のテキストに、2枚一組の図像が付されている。図1-a-bは、最初の猟犬に追われる雌鹿の図で、水彩画と木版画では左右が逆になっているが、傍らに小川が流れ、岩に寄っている鹿の構成など類似がみられる。銅版画のソースは、ヘラートの *De waerachtighe fabulen der dieren* (Bruges, 1567) に付した挿絵である。図2と3は5番目の「フェニックスの最期」である。老いたフェニックスがどのように巢に火を放つかに関して、太陽が頂点にきたときに羽を使って、火を放つことを描いている。こちらにも太陽が描かれており、銅版画同様、太陽がポイントになっているが、

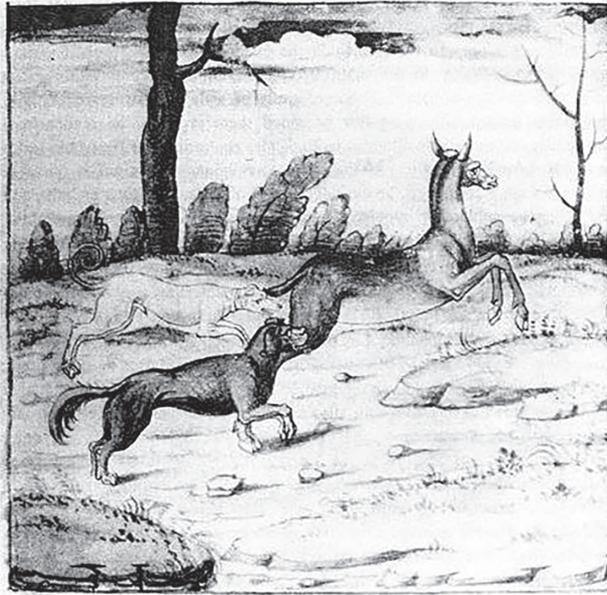


图 1-a. Glasgow University MS, SMM2, *Emblemes en rime francoise*, fol.4.2v.

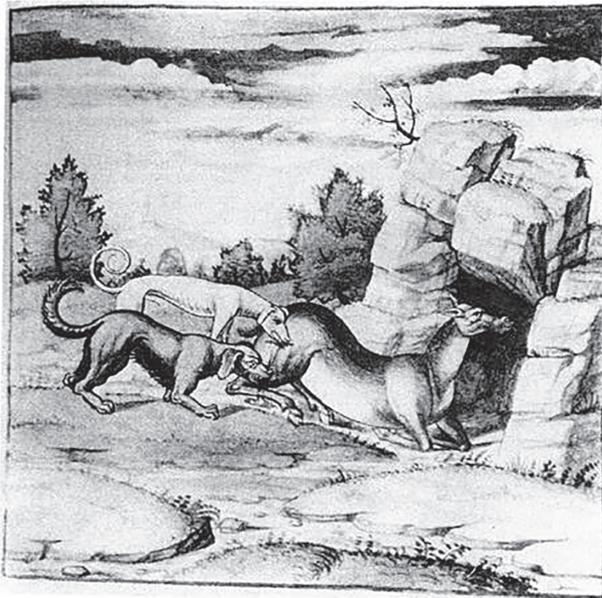


图 1-b *Ibid.*



图 2 Marcus Gheeraerts, *De waerachtige Fabulen der dieren* (1567), p.208.



图 3 Jan van der Noot, *Het Theatre* (1568), fol.A6r.



图 4 Jan van der Noot, *Theatre for Worldlings*, (1569) Diiiv

木版では、背景は海で、向こうの方に小さな船がみえる。一艘は傾き、一艘は順調に進んでおり、このエンブレム・ブックに通底する無常観を表していると思われる。木版と銅板は向きが逆になっているが、太陽と船の違いはあってもヘラートの影響が認められよう。図版に描かれたものにどのような寓意を読み取るか、それにはテキストとの協働が重要となろう。

英訳者スペンサー

こうした図版に付された韻文の英訳者が、エドモンド・スペンサーである。スペンサーを訳者に推したのはリチャード・マルカスターと推測されている。⁷⁾ 彼は1560年9月20日に創設された Merchant Tailor の初代校長で、ギリシア語、ラテン語、ヘブライ語を熱心に教育し、ジョン・デイらを支援していた。マーチェント・テイター校は、当時英国で最大規模のグラマー・スクールで、スペンサーは創立時から1569年、ケンブリッジのペンブルック・ホールにサイザーとして入学するまでの9年間、ここで学んでいた。その年5月、ゲイブリエル・ハーヴィと出会い、終生続く交流が始まる。1579年、スペンサー (EK) が『羊飼いの暦』で、コリン・クラウトの「特別親しい友人ホビノル」であり、EKが献呈辞でこの作品を「強力な弁論術とまれな学才で」弁護するよう訴えた名宛て人がハーヴィであった。『羊飼いの暦』には各月ごとに図版が付されている。挿絵入りの書物は珍しいものではないが、一枚の図像に対して題(月名)と散文の梗概と韻文が対応する形式は、まさにエンブレム的で、エンブレムの本質である視覚と言語の共助作用を利用したのは、『俗人の劇場』の翻訳経験も影響したかもしれない。

さらにスペンサーは、1591年に『俗人の劇場』のエピグラムとソネットを『嘆きの詩』(Complaints)に再録したが、ヌートの4編の黙示録的ソネットは省いた。ヌートの英訳から22年が経過し、前年には『妖精の女王』1～3巻が活字となり、『羊飼いの暦』も4版を重ねた。スペンサーは詩人として評価されるが、この間、イングランドを取り巻く政治的状況も大きく変化した。1570年代、エリザベスはネーデルラント反乱の対策として、援軍派遣ではなく金銭援助という消極的方策を選んだ。しかしネーデルラント情勢は一向に好転せず、1578年1月、エ

リザベスはレスター伯を総司令官にして援軍派遣を約束するが、スペインの反感を恐れ、反古にする。さらに窮するネーデルラントの要請にもう一度援軍を約束するが、またも撤回する。切羽つまったネーデルラント側は、イングランドを見限り、「ネーデルラントの守護者」という称号と引き換えに援助を申し出ていたアンジュー公の援助を受け入れる。そこで対フランス政策として出てきた奇策がアンジュー公との縁談であった。しかし、1584年6月、アンジュー公が亡くなり、7月にはデルフトの自邸前でオラニエ公が暗殺されると、ついにエリザベスは援軍派遣を決意し、1585年12月、レスター伯は6千人のイングランド兵とともにネーデルラントへ降り立つ。この遠征ははかばかしい戦果もなく終わり、彼は86年のアルマダ海戦でも大した働きもせず、88年に亡くなるのである。シドニーの人気を再現したかのようなロバート・デヴルー第2代エセックス伯もまた、エリザベスの寵臣となるが、レスターの求心力を欠き、いったんスペインの脅威が去ったなか、往時の戦闘的なプロテスタント貴族の勢力は戻らなかった。

このような外的状況の変化を踏まえ、『嘆きの詩』に再録された『俗人の劇場』の翻訳からベトラルカのヴィジョンである6篇のソネットのうち、最もポピュラーな最後のものを取り上げたい。6篇のソネット、①白と黒の猟犬に追われる雌鹿、②海上の船の遭難、③嵐で倒れる月桂樹の大木、④ニンフたちが水辺に座る泉が突如濁る、⑤③と④の情景に驚いて自らを殺す不死鳥、そして次に取り上げる⑥突然蛇にかまれて死ぬ美しい婦人というシークエンスは、儂い現世の虚しさを一貫して詠んでいる。以下はスペンサーの英訳で、(1)が『俗人の劇場』、(2)が『嘆きの詩』からである。

- (1) At last so faire a Ladie did I spie,
That in thinking on hir I burne and quake,
On herbes and floures she walked pensiuely.
Milde, but yet loue she proudly did forsake.
White seemed hir robes, yet wouen so they were,
As snowe and golde together had bene wrought.
About the waste a darke cloude shrouded hir,
A stonging Serpent by the heele hir caught,

Wherewith she languish as the gathered floure:
And well assurde she mounted up to joy.
Alas in earth so nothing doth endure
But bitter grieffe that dothe our hearts annoy. ⁸⁾

(2) At last so faire a Ladie did I spie,
That thinking yet on her, I burne and quake,
On herbes and floures she walked pensiuely.
Milde, but yet loue she proudly did forsake.
White seem'd hir robes, yet wouen so they were,
As snowe and golde together had bene wrought.
About the waste a darke cloude shrouded hir,
A stinging Serpent by the heele hir caught,
Wherewith she languish as the gather'd floure:
And well assur'd she mounted vp to joy.
Alas, on earth so nothing doth endure
But bitter grief and sorrowful annoy:
Which make this Life wretched and miserable,
Tossed with Storms of Fortune variable. ⁹⁾

(1) と 23 年後の (2) では、音を整えた変更 ('seemed' を 'seem'd', 'gathered' を 'gather'd', 'assured' を 'assur'd' に、'Alas' の後に句点を置いた)、そして 11 行目の 'in earth' を 'on earth' に直した点といった修正をしている。しかしそのほか大きな改訳はしておらず、初めから丁寧な英訳したことがわかる。¹⁰⁾ そして (2) で 13, 14 行目を足して押韻を整え、弱強 5 歩格のきれいな English Sonnet に仕上げている。デュ・ベレーを訳したスペンサーが、サレー伯以来のソネットの伝統を手中に収めていたことがここからも伺える。¹¹⁾ このソネットに描かれた突然雲に覆われ、蛇にかまれて死ぬ美しい女性は誰を指すのであろうか。原作はペトラルカのカンツォニエーレ』332 番の 49 から 52 行で、そこで自身をオルフェウスに、ラウラをエウリディケになぞらえている。

Or avess' io un sì pietoso stile

che Laura mia potesse torre a Morte
come Euridice Orfeo sua senza rime,
ch'ì viverei ancor più che mai lieto! (49-52)¹²⁾

詩なしにリュートを奏でてエウリディケを死から取り戻せたオルフェウスのように私のラウラを取り戻せるなら、こんなに嬉しいことはない、音楽をもって妻を冥界から取り戻せたオルフェウスに比して、詩でラウラを取り戻せない自分はもう詩も作れないと訴えている。¹³⁾ 翻って332番を読むと、この美しい女性ラウラは摘み取られた花のごとく萎れ逝くが、それはまさに『変身物語』10巻8-10章で描かれた蛇にかまれて冥界へ旅立つエウリディケである。こうしたペトラルカのヴィジョンを寓意的に解釈する注釈をベンボが、またフランスではマロが同様な注釈を書いている。¹⁴⁾ 図像に意味を与える詩文が付されたエンブレムを16か17歳の時点で訳したスペンサーは、のちに畢生のエピック・ロマンス『妖精の女王』で視覚的想像力を酷使して、複雑で多彩な寓意の森を築き上げる。『俗人の劇場』の翻訳で、ヌートの訳を通してペトラルカやデュ・ベレーといった詩人に触れたスペンサーは、ヴィジョンを寓意的に解釈し、新たな意味づけを与えて詩に生き返らせることを体験した。先に述べたように、反カトリック勢力の奮起を目論んだヌートの動機を考慮して、この女性をイヴや教会の表象を考えることも可能であるが、不慮の事故で恋人を失う詩人の嘆きを、気まぐれな運命の嵐に翻弄される人生の比喩のひとつに統合している。このことは、たとえば『妖精の女王』において、各巻の主題を引き立たせるためにさまざまな寓意的、神話的人物やエピソードを配し、豊かなイメージの層を提示していくスペンサーの詩質に通底している。こうした特質を念頭におき、最後にヌートの黙示録的ソネットについて考察したい。

黙示録的ソネットにおけるバビロンの大淫婦

4編の黙示録的ソネットは、「黙示録」12、13章の一部や17章に拠って、ローマ・カトリック教会の墮落と崩壊、来るべき真の教会のヴィジョンを示しているが、次に記した2番目のソネットに一語、誤訳といわれる箇所がある。この語に焦点をあて、ヌートの仏訳からスペンサー

がどのように工夫して訳したのかを考察し、再録しなかった理由を追求したい。

I saw a woman sitting on a beast
Before mine eyes, of Orenge colour hew;
Horroure and dreadfull name of blasphemie
Filde her with pride. And seuen heads I saw,
Ten hornes also the stately beast did heare,
She seemed with grorie of the scarlet faire,
And with fine perle and golde puft vp in heart.
The wine of hooredome in a cup she bare.
The name of Mysterie writ in hir face.
The bloud of Martyrs dere were hir delite.
Most fierce and fell this woman seemed to me.
An Angell then descending downe from Heauen,
With thoudring voice cride out aloud, and sayd,
Now for a truth great Babylon is fallen.

言うまでもなくバビロンの大淫婦とは、「黙示録」17章3から4節に描かれ、宗教改革時代、ローマ・カトリック教会を指す代表的表象であった。¹⁵⁾ このソネットの2行目に、彼女が乗る怪獣を表す色としてオレンジ色がでている。1-4行のみの引用であるが、オランダ語版と仏語版を挙げておこう。¹⁶⁾

Op een root verwich dier hebbende seuen hoyen,
Ende tien hoornen oock vol lasterlycke namen,
Sach ick sitten een wif, stout sonder heur te scamen,
Met peerle, purpur, gout, verciert em heur verfroye: (*Het Theatre...*)

Une femme en apres sur une beste assise
Le vis deuant mes yeux, de migranne couleur;
De blaspheme le nom deffroy aussi l'horreur
Escorte luy faisoit: (*Le Theatre...*)

獣の色にオランダ語版では 'purpur' を用いている。この色は中世末期ヨーロッパを代表する色彩論、シシルの『色彩の紋章』（1435 - 58 年ごろ）などでも寓意的に複雑な色だが、古代から紫、あるいは深紅を表す。¹⁷⁾ これをフランス語版で、ヌートは 'migraine' と訳した。migraine とは、現代仏語の grain の語源、ラテン語の granum を語源とする古仏語で、graine は、12 世紀より「カイガラムシを染料とする緋色の染色」を意味するようになった。中仏語になると、migraine の形がでてきて、やはり緋色の布を意味した。17 世紀を通じて代表的な仏英辞書であった Randle Cotgrave の *A Dictionarie of the French and English Tongues* (1611) でも、'...Scarlet, or Purple in graine' とあり、緋色や深紅を表す色である。果実を指すにしろ色を表すにしろ、'orange' という単語をスペンサーはここでしか使用していない。¹⁸⁾ 彼の詩は色彩表現も豊かで、オレンジ色をほかで使ってもおかしくはない。一例に過ぎないが、『羊飼いの暦』からニンフ Eriza の描写を挙げておこう。

See, where shee sits vpon the grassie greene,

(O seemely sight)

Yelad in Scarlot, like a mayden Queene,

And Ermines white,

Vpon her head a Cremesin coronet,

With Damaske roses and daffadillies set:

Bayleaues between,

And Primroses greene,

Embellish the sweete Violet. (*The Shepherdes Calender*, April, ll.55-

63)

このエリザはもちろん court cult におけるエリザベス女王であり、ちょうどニコラス・ヒリアードの細密肖像画における原色の使用同様、鮮やかな緑、赤、青を基調とした色彩の効果を上げている。当時の英国に「大陸」の色彩理論は知られていたが、ヒリアードは、3 原色理論以前に、5 色の主要な色を挙げている。

Now besides whites and blacks there are but five other principal

colors which are colors of perfection in themselves, not participating with any other, nor can be made of any other mixed colors ...; murrey, red, blue, green and yellow. (Leonhard 154)¹⁹⁾

ヒリアードの主要5色のうち、murrey, すなわち桑の実の暗紅色は、紋章では sanguine となるが、紅より暗い濃紫に近い色である。それは『羊飼いの暦』のエリザの 'scarlot', 'cremesion' といった緋色、深紅といった鮮やかな赤とは違い。当時の英国で用いられた赤を巡る色彩のヴァリエーションは決して貧弱ではないが、この 'scarlot' は、ヌートの migraine になろう。ここで「黙示録」中のバビロンの大淫婦、“the purple clothed woman on the seven hill” (17:4) の描写をみてみよう。

...I saw a woman sitting on a scarlet-colored animal, full of blasphemous names, having seven heads and ten horns. The woman was dressed in purple and scarlet...(The Revelation 17: 3-5)

「黙示録」では、scarlet と purple が使われている。スペンサーの『妖精の女王』でユーナの二枚舌の双子、Deceit と Shame の娘 (1巻5篇26連) であるデュエッサと、プロテスタント派にとってローマの虚栄と欺瞞の擬人化たるバビロンの大淫婦との強い連関を示唆する。彼女は獣に乗り、緋色の衣に包まれ、金と真珠で着飾っている。“...clad in scarlot red, / Purpled with gold and pearles of rich assey...” (1巻2篇13連2-3行) ヌートのソネットを訳したスペンサーも scarlet を6行目で使っている。彼の訳は、一行一行、忠実に訳をつけていることを前に確認したが、migraine にも、より忠実な訳語を考えたはずである。orange としたのは単なる誤訳であろうか。

orange は、古イタリア語 melarancio が古フランス語 orange となり、中世英語に入った。OED によれば、15世紀には orange あるいは orange として文献に載るようになる。果実のオレンジは、初出が1387年で、エリザベス朝になると、レモンとともにグローバルな輸出入品リストのトップに上がる輸入品であった。(Salkeld 133) 16世紀初頭には、かんきつ類がイギリス料理のレパートリーの一部として定着しており、たとえば祝日にはカワカマスワイン、オレンジ、デザートやスパイスと

一緒に煮た。(ハイマン 149)

オレンジが比喩的に文学に用いられていた例をシェイクスピアから探すと、オレンジへの言及は『空騒ぎ』(1600年)に2か所あり、果実が比喩として用いられている。ヒアローとレオナートーの仲を聞いたクロードイオが、ベアトリスから“civil as an orange, and something of that jealous complexion,”〔「オレンジのように深刻なお顔の色、嫉妬を表して。」(2.1.294-95)〕とからかわれる箇所と、ヒアローの不貞を疑ったクロードイオが彼女を“rotten Orange”(4.1.32)に例える箇所である。²⁰⁾ オレンジの色は嫉妬の色を表す黄色と関連付けられており、purpur, migraineとは異なる。後は唯一『夏の世の夢』(1595-96年)でポトムがピラムス役を引き受け、どんなつけ髭にしようかと迷うとき、コトグレイヴの辞書にあった‘orange-tawny’を使う。“I will discharge it in either your straw-color beard, your orange-tawny beard, your purple-in-grain beard, or your French-crown-color beard, your perfit yellow”(1.2.93-96)と。職人のポトムが気取って藁の淡黄色、赤みがかった褐色、深紅、フランス金貨のようなまっ黄色を口にする。前述したように16世紀末には黄から赤の色彩表現のヴァリエーションが豊かとなっていることが伺えよう。

一方、現代の reddish yellow colour という orange は、*OED* では初出が1600年である。(A-5)しかし、色としての orange はA-6でそれ以前に用いられている。“A roundel tenné (tawny-colored)”と記されており、初出は1562年、Gerald Leigh の *The Accedence of Armorie* である。これは『紋章の手引き』という紋章学の入門書で、作者のジェラルド・リーは、宮廷馬上槍試合係だった Sir Henry Leigh の息子である。父もインプレーサなどに精通していたはずであり、インナーテンブル法学院のメンバーである法律家であった。彼の書は、大変ポピュラーで1568、72、91、97、1612年と版を重ねている。この書の tenné の項を引用する。それは赤と黄色からなる色、すなわち現代のオレンジ色である。

“Now to the sixth colour, whiche we call Tawney, and is blazed by thys woorde, Tenne. It is a worshipfull colour, and is of some Herhaughtes called Bruske, it is made of two bright colours which is Redde and yellowe. (19)

紋章に用いられる Argent, Azure, Gules, Or, Sable に次ぐ 6 番目の色 (tincture) である。リーの書は、17 世紀の John Guillim による *Display of Heraldry* (1610) でも次のように引用されている。“Tawny (saith Leigh) is a colour of Worship, and of some Heralds it is called Bruske.” (I. iii. 20)²¹⁾ つまり、Orange とは Tawny の小円形紋であり、崇敬の色とされている。スペンサーが当時リーの書を見ていたかどうかは推測の域を出ないが、ジェラルドがメンバーだったインナー・テンプル法学院は、レスター伯ロバート・ダドリーと大変縁が深いのである。テンプルが保持を願ったライオンズインの処遇に対して、ロバートがエリザベスに口添えして首尾よく運んだことに感謝して、1561 年、幹部員はレスターを特別に入院させ、翌年、兄のアンブローズにも入院の許可を与えた。さらに、同年のクリスマスと 1562 年新年の祝宴の Lord Govenor (責任者) に彼を選出したのである。60 年代がレスターとエリザベスの蜜月の絶頂期であり、彼を取り巻く宮廷内外の華やかな人脈を考慮しても、外部者が責任者を務めるのは極めて異例であった。この余興に上演されたのがトマス・サックヴィルとトマス・ノートン共作の悲劇『ゴボダック』である。もう一つの余興とともに、これは同年 1 月 18 日、エリザベスの前で院の学生によって上演された。もう一つの余興とはアーサー・ブルックが作者かもしれない仮面劇である。ジェラルド・リーの作は、紋章官ジェラルドと騎士リーの対話形式で紋章学の基礎が語られるパンフレットだが、その末尾にクリスマス祝宴の仮面劇についての簡単な報告がある。この見せ場は、レスターがパラフィロス王に扮し、パラスの色 (金、銀、紫) のスカーフをまいた法学院生たちひとりひとりにペガサスの騎士に叙する疑似式典であろう。(竹村 73) スペンサーが終生示したレスター伯への同情、『妖精の女王』にみられる騎士たちの多様な紋章的表現を考慮すると、²²⁾ 一層スペンサーが用いた orange が、リーの『紋章入門』に拠っている可能性が高まる。グラマースクールの教材として古典文学やエラスムスのほかに、マルカスターと並ぶ当時の主要な教育者、ジョン・プリングリーやチャールズ・フルが教材に推奨したロイスナーの『皇帝のシュンボルム集』などのエンブレムブックに触れていたであろうスペンサーに、紋章に関する知識がまったくなかったとは考えにくい。²³⁾ さらに凶版をみると、彼女を崇拝する 5 人の

者たちが左側に描かれており、ローマ・カトリックという偽りの宗教を奉ずる図と捉えたとも考えられる（図5）Tenne, Tawny は赤がかった褐色であり、migraine のような深紅や緋色ではないが、赤系であることに変わりはない。Cotgrave の辞書でも orange は、'Orange-tawnie, orange-coloured' とあり、オレンジは褐色がかった色と捉えられている。スペンサーがヌートを翻訳した 1567-8 年では、オレンジは色としては紋章学における色として文献に現れた。彼は 6 行目で 'scarlet' を使用しており、2 度同じ単語を使用するのを避け、さらに崇敬の色であるということで orange を使用したと考えられる。

ここで紋章学の色としてのオレンジという可能性に加え、当時の政治的状況への配慮も加えたい。『嘆きの詩』でヌートの 4 編のソネットを省いたのは、オラニエ公ウィレムの影響があるかもしれない。彼は、ドイツ生まれのナッサウ家のウィレムで、オランジュ（オランダ語でオラニエ）を相続してウィレム一世となり、ネーデルラント連邦共和国の基礎を築いた。オランダ王家のオラニエ-ナッサウ家を創設し、オレンジとオレンジ色はオラニエ-ナッサウ家の象徴となった。（ハイマン 20 - 23）オラニエは、英語表記では Orange であり、オレンジとオレンジ色がオラニエ公の表象であることを知ったスペンサーが、黙示録的ソネットを省いた可能性がある。ローマ・カトリックの偽りの信仰のシンボルであるバビロンの大娼婦を詠ったソネットにオレンジが含まれては、ローマが滅び、真の信仰が勝利を収めるというこれらのソネットの主題と相いれない。軍事介入を主張し続けたレスター亡き後も、ネーデルラント軍は独立を勝ち取るまで戦闘を続ける。そこでオレンジ色は、カトリック勢力と戦うユグノーなどのプロテスタント勢力と結び付けられるようになった。²⁴ ただし黄色がかった赤というオレンジ色は、一般的なアカネ由来の染料で出せるため、お仕着せとして当時のイングランドで広く用いられていた。例えば、レスター伯やシドニー亡き後、1588 年、ガーター勲位を授与され華々しく寵臣となったエセックス伯は、同年のアルマダ海戦勝利記念パレードで、200 名の騎馬隊、100 名を越す銃兵隊にオレンジと白のお仕着せを着せたという。（竹村 183）レスター伯の後継者たるエセックス伯が用いたという点でも、スペンサーはヌートのソネットを省いたかもしれない。戦闘的なプロテスタント主義をうたった 4 編のソネットは、ネーデルラントへの軍事介入が悲願だったレ

スター派に訴える価値のあるものであった。しかし、エリザベスやバーリー卿があれば恐れたスペインの脅威もいったん去った。そしてスペンサーは、単なるヌートのソネットの翻訳者としてでなく、彼が「願うイメージにエリザベスを作り直す」ことに集中し、(パロウ 109) エピック詩人として『妖精の女王』を女王に献じるのである。

結論

スペンサーが『俗人の劇場』を英訳した時点で、色としての orange は、紋章学において用いられており、それは、tenne, or tawny と同義であった。Orange という語を選んだのは、単なる誤訳ではなく、図版に描写されたバビロンの大淫婦を崇める者たちの姿に呼応して、ジェラルド・リーの『紋章の手引き』で崇敬の色と書かれていたことに由来するのではないだろうか。リーは、レスター伯やマルカスターとも縁が深いインナーテンブルのメンバーであったから、彼の著作がスペンサーの目に触れることもあったかもしれない。そしてヌートの英訳は、マルカスターの指導のもとで熱心に学ぶ若きスペンサーが、終生続くレスター派への好意を育くむ端緒となったのではないだろうか。しかし、レスター伯の運命とともに、70年代から90年にかけて対ネーデルラント情勢は大きく変化した。オラニエ公との関連でオレンジ色がプロテスタント主義を連想させるようにもなった。ネーデルラントへの軍事介入を促すようなソネットの内容に配慮したこと、また orange が高貴な身分の人々に関係する紋章の色であり、バビロンの大淫婦に全く適切でないこと、これらの点を踏まえて、ヌートの黙示録的ソネットを『嘆きの詩』に再録しなかったと考えられる。

注

本研究は科研費（15K02314）の助成による成果の一部である。

- 1) ヌートの『俗人の劇場』にはモットーがないが、モットーのないことが本作をエンブレムから外す理由はない。アルチャートの初期のいくつかの版やラ・ベリエールの *Theatre des bons engins* (Paris, 1539) は、モットーなしで出版されている。
- 2) ヌートの名は、John van der note として 1568 年、ロンドン市長が枢密院に報告した市内外国人証明書に見られる。(British Library, Lansdowne

- MS 202, fol.22r.I4.) ヌートの渡英前後の詳細は、Karel Boston (1997:49-50) を参照。
- 3) Peter M. McClusky, (2019:4) 彼らがいかに手工業、農業など多方面のテクノロジーの発展に関わったかについては、John J. Murray, (1957: 837-54) を参照。
 - 4) ペトラルカとヌートの影響関係に関する詳細は、以下の章を参照のこと。Paul J. Smith, “Petrarch Translated and Illustrated in Jan van der Noot's *Theatre* (1568)” in *Dispositio: Problematic Ordering in French Renaissance Literature*, 133-42.
 - 5) デイの印刷工房とオランダ人避難者とは、以下に詳しい。Elizabeth Everden, (2004: 63-77)
 - 6) University of Glasgow, Stirling Maxwell Collection, MS. SMM2. ヌートの木版画との著しい類似は、マイケル・バース氏によってはじめて指摘された (Bath, 1988, 73-105.)
 - 7) マルカスターの影響下で、『俗人の劇場』中のデュ・ベレーのソネットの翻訳をまずしていたという。コリン・パロウ, 2011, 21-2 頁参照。マルカスターはギリシア語、ラテン語の厳しい訓練とともに演技を奨励した。
 - 8) ヌートの英訳からの引用は、STC18602 に拠る。
 - 9) ヌートの翻訳以外のスペンサーからの引用は、以下に拠る。Hugh Maclean ed. *Edmund Spenser's Poetry*, W. W. Norton, 1968.
 - 10) ヌートは、ペトラルカの原文ではなく、マロの仏訳に拠って仏語版を作成したが、彼のプレイアード派の受容は、ルネサンス期のヨーロッパのソネットの展開において、高く評価されるべき質の高さであるという。Leonard Forster, (970 :31-35) を参照。
 - 11) ただし、スペンサーが2行足して創作したのは、デュ・ベレーの翻訳に対する規範と相いれない。彼は『フランス語の擁護と顕揚』(1549年)において、著者の範囲を超えて逸脱してはならないと逐語訳を推奨している。 (“n'espacier point hors des Limites de l'Auctem”) quoted in Hassan Melehy, *The Poetics of Literary Transfer in Early Modern France and England*, Routledge, 2010, 107. 本書第5章は “Visions of Spenser” で、『俗人の劇場』の翻訳がソネット詩人としての展開に関わっていることが詳しく論じられている。
 - 12) Petrarch, *Opere.*, Florence, 1975.
 - 13) ペトラルカにとってオルフェウスは、“poetic father figure” である。Thérèse Migraïne-George (1999: 226-7.)
 - 14) 多数ある注釈の中で、1568年までに22回も再版された Alessandro Vellutello の注釈 (1525) は、英文学の影響が認められている。以下を参照。William J. Kennedy, “Commentary into Narrative: Shakespeare's Sonnets

- and Vellutello's Comentary on Petrarch", *Allegorica* 10 (1989: 119-33)
- 15) 宗教改革期のバビロンの大淫婦について、Victoria Brownlee (2015:213-33) が、カトリック派のみならず改革派のテキストにもっともよく言及された彼女は、改革派が新しいエルサレムを成型する際、常に相克すべきイメージとして文芸に立ち上がることを論じている。
 - 16) オランダ語版は、*Het theatre oft Toon-neel waer in ter eender de ongelucken ende eleden die den werelts gesinden ende boosen menschen toecomen...der poeteryen ende schildern. Deur H. Ian Vander Noot*, London, 1568: STC 18601. フランス語版は、*Le Theatre*., London, 1568: STC 18603 に拠る。
 - 17) 詳細なブルブルの意味に関しては、伊藤亜紀 (2002:183-212) に詳しい。
 - 18) Carles Grosvenor Osgood, *A Concordance to the Poems of Edmund Spenser*, Carnegie Institute of Washington, 1915, 618.
 - 19) ヒリアードの色彩論は、アリストテレスの *De Meteorologica* やその注釈の伝統に拠っている。エリザベス朝時代の色彩論の詳細は、Karin Leonhard, (2015: 140-69)を参照。
 - 20) リーの書をもとにした紋章学の著作はほかにもあり、たとえば John Bossewell, *Works of Armorie, Devyded into three Bookes, Entituled, the Concordes of Armorie, the Armorie of Honor, and of Coates and Crestes* (London: Richard Tottel, 1572) は、テキストに彩色された木版画で紋章図が付され、エンブレム・ブックといえる。
 - 21) シェイクスピア作品からの引用は、オクスフォード版シェイクスピア全集 (第2版) に拠る。
 - 22) 『妖精の女王』における武具の表象については、John E. Lundy, "Armour as Metaphor in Spenser's *Fairy Queen*: The Political and Religious Aspect" に詳しい。
 - 23) エンブレムは、善を称揚し、悪を退ける教材としてグラマー・スクールで活用されていた。特にレトリカル・コモンプレイスを集めて同じ内容を多用な言い回しで使えることを目指したグラマー・スクールの教育において、エンブレムのエピグラムを訳して収集することを勧めている。アルチャートなどの名前は、プリンズリーが詩句の豊富な例が載っているのが推奨した、ジョン・ストックウッドの『生徒のエッセイ集』(*Progymnasma Scholasticum*, London, 1597) に挙げられている。詳細は、Foster Watson, *The English Grammer Schools to 1660: Their Curriculum and Practice*, rpt. of 1905, Augustus M. Kelly, 1970) を参照。
 - 24) David Broasky, (2008: 257) 16世紀にいつ頃かわからないが、オレンジ色は "canting symbol of the Hause of Orange-Nassau" となった。

引証文献

欧文文献

- Bath, Michael. "Verse Form and Pictorial Space in Van der Noot's *Theatre for Worldlings*" in Karl Josef Höltgen, Peter M. Daly and Wolfgang Lottes eds. *Word and Visual Imagination: Studies in the Interaction of British Literature and the Visual Arts*. Erlangen, 1988, 73-105.
- Boston, Karel. "Van der Noot's Apocalyptic Visions: Do You 'See' What You Read?" in Bart Westerwell ed. *Anglo-Dutch Relations in the Field of the Emblem*. Brill, 1997.
- Broasky, David. *Spanish Vocabulary: An Etymological Approach*. University of Texas Press, 2008.
- Everden, Elizabeth. "The Fleeing Dutchman? The Influence of Dutch immigrants upon the Print Shop of John Day" in David Loads ed. *John Fox at Home and Abroad*. Ashgate, 2004. 63-77.
- Forster, Leonard. *The Poet's Tongues: Multilingualism in Literature*. Dunedin, 1970.
- Kennedy, William J. "Commentary into Narrative: Shakespeare's Sonnets and Vellutello's Commentary on Petrarch" in *Allegorica* 10 (1989), pp.119-33.
- Leonhard, Karin. "Painted Gems. The Color Worlds of Portrait Miniature painting in Sixteenth- and Seventeenth-Century Britain" in Tawrin Baker et al, eds. *Early Modern Color Worlds*. Brill, 2015.
- Lundy, John. "Armour as Metaphor in Spenser's *Fairy Queen*: The Political and Religious Aspects". Unpublished thesis of University of Ottawa, 1972.
- McCluskey, Peter Matthew. *Representations of Flemish Immigrants on the Early Modern Stage*. Routledge, 2019.
- Melehy, Hassan. *The Poetics of Literary Transfer in Early Modern France and England*. Routledge, 2010.
- Migraine-George, Thérèse. "Specular Desires: Orpheus and Pygmalion as Aesthetic Paradigms in Petrarch's *Rime Sparse*" in *Comparative Literature Studies* vol. 36 no. 3 (1999), pp.226-46.
- Murray, John J. "The Cultural Impact of the Flemish Low Countries on Sixteenth- and Seventeenth-Century England", *American Historical Review* 63 (1957), pp. 837-54
- Petrarch, Francesco. *Opere. Canzoniere, trionfi, Familiarum rerum Libri*. Florence, 1975.
- Shakespeare, William. *The Oxford Shakespeare: The Complete Works* (Second Edition). Oxford university Press, 2005.
- Smith, Paul, J. *Dispositio: Problematic Ordering in French Renaissance Literature*.

- Brill, 2007.
- Spenser, Edmund, Hugh Maclean ed. *Edmund Spenser's Poetry*. W. W. Norton, 1968.
- University of Glasgow, Stirling Maxwell Collection, MS: MSS2, "Emblems en Rime Françoise".
- Van der Noot, Jan. *Het Theatre Oft toon-neel, waer in ter eender de ongelucken ende eleden die den wewelts gesinden ende boosen menschen toecomen... der poeterien ende schilden Deur H. Jan Vader Noot*. London, 1568: STC18601.
- _____. *Les Theatre AV-quel sont exposés et monstrés le incoueniens & miseres qui suiuent les mondains & vicieux...* London, 1568: STC18603.
- _____. *A Theatre wherein be represented as wel the miseries & calamities that follow the voluptuous Worldlings, ...* London, 1569: STC18602.
- Watson, Foster. *The English Grammer Schools to 1660; Their Curriculum and Practice*, rpt. of 1905. Augustus M. Kelly, 1970.
- Westerwell, Bart. "An Author's Strategy: Jan van der Noot's *Het Theatre*" in Bart Westerwell ed. *Anglo-Dutch Relations in the Field of the Emblem*. Brill, 1997.

邦文文献

- 伊藤亜紀『色彩の回廊－ルネサンス文芸における服飾表象』ありな書房、2002年。
- 竹村はるみ『グロリアーナの祝祭－エリザベス一世の文学的表象』研究社、2018年。
- ハイマン、クラリッサ著、大間知知子訳『オレンジの歴史』原書房、2016年。
- バロウ、コリン著、小田原謡子訳『スペンサーとその時代』南雲堂、2011年。